

砂名の ベトナムに乾杯

第23回 デリバリーを通して、お客様のお顔が見える幸せ

5月末から始まった飲食店の店内飲食禁止は、7月初旬にはデリバリーさえも禁止になり、人々は自炊せざるを得なくなった。当店【蔵】がSimba社と提携した「日本の食材・食品・調味料」のデリバリーも、はじめのうちは酒屋らしく「日本酒と酒肴」というコンセプトで商品をラインナップしていたが、日々取り扱い商品は増え、ついに日頃の食卓に必要な物すべてを扱うようになった。

お客様のほとんどは日本人駐在員の方たちで、「豆腐、納豆、油あげ」が断トツに売れた。ホーチミンは日本全国から人が集まっている。東京と違うのは、全国から集まって来た人たちがまもなく「東京」に上書きされるのに対して、ホーチミンではそれぞれの出身地の気質や文化をそのまま保っていることだ。そのうちにお客様の出身地が想像できるようになった。いつも「讃岐うどん」と「味付けいなり」を注文されるお客様がいらっしゃる。実はリアルでこのご家族を存じ上げているのだが、まだ小さいお子様たちとお父様、お母様が食卓を囲んで「きつねうどん」をおいしそうに食べていらっしゃるようすが浮かんでくる。「美味しいね」「うん、良かったね。ホーチミンでも、きつねうどん食べられて」。もちろん稲荷寿司を作られたのかも知れないが、そんな光景が浮かぶと、この仕事をやらせていただいて本当に幸せだと思う。

そしてよいよ8月下旬。外出一切禁



Simba×【蔵】のデリバリーサービスで注文。酒、食品・食材・調味料・飲料の他、生鮮食料品、日用品、ペット商品、文具に至るまで取り扱っている。

止のもっとも厳しい社会的隔離になった。

最初のうちはそこそこ食糧を確保されていたのか注文数に変化は見られなかった。しかし一週間が経過、延長の可能性が出た途端、堰を切ったように注文が増加した。職業や生活パターン、居住地域など十人十色なのに、当店のLINE公式アカウントへのアクセスが同時刻帯に集中した。ホーチミン市内三か所がデリバリー禁止区域に指定された。昨年12月に2区と9区と合併し、今やホーチミン市でもっとも大きい区となったTu Duc区もその一つだった。政府はこの区をゆくゆくホーチミン市東部の一大経済・教育区にと考えているようだ。ここに日本人が多く住む旧2区が含まれていた。つい昨日までは隣同士だったエリアが、今日は配達「可」「不可」の命運を分けることになった。さらに私が住んでいるBinh Thanh区がレッドゾーンとなった。この区には10,000戸の高級コンドミニアムを有する街「Vinhomes

Central Park」が含まれていた。トラックは交通規制で迂回を余儀なくさせられ、配達は検問所やゲートまでとなった。さらにドライバーには夕方5時までに倉庫のある10区まで戻らねばならないという規制が課せられ、配達は困難を極めた。最初の隔離期限の9/6が終了したが、9月末まで延長された。配送エリアによる縛りはなくなったが、ここからが大変だった。物が入荷されて来ないのだ。加工品は「生産工場がストップしている」ということで安定供給ができない。物流も人手不足でストップしている。その上、スーパーへの供給を優先するよう政府からお達しが出た。お客様の注文を確定しても、配達直前に納品を断られたり、延期されたり、とても販売できるような代物でない商品が入ってくるようなことが次々と発生した。現場は混乱を極めた。

このコラムが掲載される頃には懐かしい話となっているに違いないが。



月森砂名(つきもりさな)

奈良県出身。同志社大学卒業。2015年、ベトナム初の角打ち【日本酒で乾杯!】に続き、2020年、Pham Viet Chanhにて日本酒専門の「角打ちのある酒屋」【蔵 KURA】をオープン。経営に携わる。東京で舞台撮影や制作の仕事をする傍ら、作家活動を行う。2009年よりNPO法人Layer Boxにて、日本の伝統文化について、大学、高校、専門学校とともに、PV、3D、CGなどのコンテンツ制作および世界発信を行う。